

高橋正雄（著）

漱石文学が物語るもの—神経衰弱者への畏敬と癒し

二通 論（札幌学院大学人文学部人間科学科）

精神の病者・治療者としての漱石は現代人の心に灯を点す

1984 年から紙幣の肖像に文化人が採用されているが、その第 1 号として千円札に登場したのが夏目漱石である。漱石は日本文化人オールタイム・ベストワンと言っても差し支えないであろう。『坊ちゃん』は少年少女文学全集などで少年期に接するものだし、『こゝろ』は青年期の入口で教科書の題材としてその一部に出会う。1 万円札の福沢諭吉の著作を読む人はそういないだろうが、漱石は世代、時代を超えて読まれている。それだけではない。たとえば、漱石を手がかりにした 2008 年のベストセラー『悩む力』（姜尚中（著）、集英社新書）がそうであるように、漱石読み直しの機運が高まっているのだ。

さて、本誌「総合リハビリテーション」の連載でお馴染みの高橋正雄氏の標記新著を読むと、今、なぜ漱石なのかがよくわかる。著者は精神科医であるが、病跡学研究者として著名であり、本誌や日本病跡学雑誌、日本医事新報を中心に論文、著書を発表し、1999 年には日本病跡学会賞を受賞している。病跡学とは、天才に関する精神医学的な研究であるが、著者は、病や障害を抱えながら生きた人物の研究を通じて、病に対する当事者の対応や、人生において病が果たす積極的な役割、障害をもつ者の可能性などを学ぶ学問として、今日的課題に重ねようとする。そこにあるのは、病跡学を、今を生きる障害当事者に直接的に役に立つ学問として位置づけようとする積極的な意志と情熱だ。

本書の妻さは、頁をめくるごとに、なるほどそう

だったのか、という感慨が得られるところにある。精神障害者としての漱石はどのような症状に苛まれていたのか、その症状はどのように作品世界に反映されていたのか、漱石は精神障害をどのように評価していたのか、病める精神の治療者としての漱石の功績など、まさに全面展開である。

そのうえで、漱石の至らない点についても指摘する。たとえば、「漱石の天才論」の項で出てくる「漱石は天才ゆえの不遇という方向のみを強調しているが、それと同時に、不遇なるがゆえの天才という逆方向のベクトルも考える必要があるのではないか？」といった提起や、天才自身が潰れてしまうほどの周囲の嫉妬については捨象しているという批判である。漱石と言えども絶対視しない批判精神にこそ、著者の真骨頂がある。

著者の鏡子夫人についての論究も興味深い。夫人は、漱石の症状について「一生懸命きき耳をたてて、あらぬ妄想を構えて、疑いの上に疑いを築いて、根掘り葉掘り飛んでもないことを考える」と記述しているが、臨床的にも正確な表現であると高く評価する。

圧巻は、鈴木三重吉、森田草平、武者小路実篤らへの手紙の件である。ここでは、著者が讀えてやまない精神療法家夏目漱石の面目躍如といった姿が活写される。彼らの精神の病も漱石の紡ぎだす言葉にかかればひとたまりもないということか。

読後、私の心に明るい灯が点った。漱石の真髓に触れることができたからだ。

（四六判 264 頁 定価 3,800 円＋税 みすず書房刊 2009）